

心理学の論文作成における文献引用の書式について

佐方 哲彦*

The Manual of Psychological Writing: How to Quote References

Sakata Tetsuhiko

日頃、論文指導していて気になるのは、学生たちが基本ルールを守らずに執筆している点である。この『発達臨床心理学研究所紀要』に投稿された大学院生の論文を査読していても、基本ルールに従って書かれていない論文が散見され、論文の書き方の基礎を教える必要性を痛感する。いくら素晴らしい内容の研究論文を書いたとしても、マニュアル通りに書かれていなければ、読んでもらえなかったり、まったく評価されなかったりすることが多いことを、まず強調しておきたい。

論文作成にあたり、参考・引用文献を数多く読んでいれば、それらをモデルに真似をすることで、ある程度まで書き方を学ぶことができる。また、各学会誌の投稿規定を読めば、どのように書けばよいか分かる。たとえば、『心理学研究』に投稿する場合は、日本心理学会の『執筆・投稿の手引き 1991年版』（“執筆・投稿の手引き”改訂委員会, 1991）に従わなければならないし、それ以外の心理学系の学会誌の場合も、このマニュアルに準拠するように要求されることが多い。しかし、このマニュアルは、実験・調査系の論文作成には適しているが、臨床・実践系には適さない面がある。また、最近学生たちが活用しているインターネット上の資料の扱いについては何も書かれていない。このように『執筆・投稿の手引き』は、筆者が指導する学生たちにとって必ずしも適当ではないと思われるのである。とはいえ、文献や資料の参照・引用の仕方については、ほぼ一定のルールが存在しているので、本稿では、心理学論文の書き方について、とくに文献・資料を参照したり引用したときの書式に焦点づけてまとめておきたいと思う。

ところで、学術論文の書き方を知るという意味では、古郡(1997)『論文・レポートのまとめ方』、山内(2001)『ぎりぎり合格の論文マニュアル』、小笠原(2002)『大学生のためのレポート・論文術』、小笠原(2003)『インターネット完全活用編—大学生のためのレポート・論文術』などの手頃な新書本がいくつか出版されているので、大いに活用すべきであろう。とくに、小笠原の2冊は心理学論文と共通点が多い教育学系の論文の書き方やインターネットの活用方法などが詳しいので、参考になる。そして、心理学論文を執筆する場合には、日本心理学会の上記マニュアル以外に、Findlay(1993)の『心理学：実験・研究レポートの書き方—学生のための初歩から卒論まで』を参考にするとよい。本稿では、以上の書籍を参考に、具体例や注意事項を示しながら文献の参照・引用の書式について紹介する。具体例として挙げる文献・資料は、筆者の手元にあったものから適当に取り上げた。また、注釈は【 】で示している。なお、アルファベットと数字は半角

* 武庫川女子大学文学部人間科学科教授 発達臨床心理学研究所研究員

表示が原則である。

1. 本文中における著者名の表記

本文中では、著者名（年号）または（著者名，年号）とし、外国人は原則としてアルファベット表記にする。同姓の著者が複数いるときは混同を避けるために、日本人には名前を、外国人には名前のイニシャルを添えるほうがよい。2名共著の場合、日本人は・（中黒）、外国人は&（アンド）で両者の姓を書く。さらに、著者が3名以上になれば、初出時には著者全員の姓を挙げるが、2回目からは筆頭著者の姓を挙げたうえで、日本人では「他」「等」を使ったり平仮名で「ほか」「ら」と書いても間違いではないが、統一しておかねばならない）、外国人では「et al.」を添える。

例 ①河合俊雄（1991）は、夢の視覚的優位性について…と述べている。

【同姓他者との混同を避けるため名前も表記した。ここでは、後で河合隼雄の文献を挙げているので区別した。なお、年号で文献をはっきりと区別できるならば、名前までつけなくてもよい】

②アイデンティティ尺度として日本語版の EPSI（中西・佐方, 2002）などを利用すればよい。

【2名共著の場合、漢字や仮名の場合は・（中黒）でつなげる。外国人を片仮名で表記したときも・（中黒）を使う】

③長沼・落合・落合（2000）の研究によれば、…である。

【初出時には、著者全員の姓を挙げる。同年に同姓の連名でありながら異なる著者による文献を他に引用していれば、名前まで入れるべきである】

④前述した日本版 BAQ を作成した安藤他（1999）の研究では…

【3名以上の共著の場合、2回目の引用から筆頭著者を挙げたうえで「他」「等」とする】

⑤攻撃者との同一視（Freud,A., 1936）とよばれる防衛機制は…

【同姓他者との混同を避けるためイニシャルを入れる。ここでは、後出する Freud,S.の文献と区別するために入れたが、年号で文献を区別できるので必須ではない】

⑥ Shane & Shane（1980）は自己を4つに区別して…

【もし同年に公刊された同姓の連名の論文で、他の著者を含んだり、筆頭著者が交代した別の文献を引用していれば、Shane,M. & Shane,E.のようにイニシャルが必要になる】

⑦子どもは再接近危機（Mahler, Pine, & Bergman, 1975）を乗り越えて…

【3名以上の外国人の名前は、(カンマ) と&（アンド）でつなげる。&（アンド）の前にも、(カンマ) を入れることが多い】

⑧ EPSI は尺度としての十分な信頼性と妥当性が確認されている（Rosenthal et al., 1981）。

【3名以上の外国人の場合、2回目からは筆頭著者に et al.をつける】

2. 直接引用の書式

直接引用とは、原著論文の文章をそのまま本文中に示すことをいう。自分の言葉で表現するとかえって長くなったり、言い換えると原著者の真意が伝わらなかつたりする場合や、原著者の表現そのものが重要であったり、自分の結論を先行研究によって支持してもらいたい場合などに限って行うべきもので、通常は避けたほうがよい。また、長い直接引用は望ましくない。

直接引用する場合は、引用記号「」（鉤括弧）の中に原文をそのまま正確に書き写す。少し長い引用は、「」をつけずに独立した段落とし、各行の先頭（および末尾）を数文字落として書くほうがよい。そして、必ず出典および引用ページを明記する。なお、たとえ原文が間違っているように思えても、自分で修正せずに書いてある通りに書き写し、（ママ）などの注釈を入れる。もし修正して引用したならば、そのことを注釈として記しておくべきである。また、部分的に省略する時は「…（中略）…」、強調のために下線や傍点などを入れた場合は（下線は筆者）（傍点筆者）などのように断っておかねばならない。

例 ⑨河合隼雄（1992）は「心理療法とは、悩みや問題解決のために来談した人に対して、専門的な訓練を受けた者（下線は筆者）が、主として心理的な接近法によって、可能な限り来談者の全存在に対する配慮をもちつつ、来談者が人生の過程を発見的に歩むのを援助することである」（p.3）と述べている。

【河合隼雄の1992年の著書の3ページ目に「」内の文章が書かれている。強調したい部分に執筆者が下線を入れた】

⑩「子どものカウンセリングをすすめる際の中心課題は、「子どもの心を理解すること」と「子どもとよい関係をつくること」です。…（中略）…治療的变化にとって、よい人間関係を作り上げることが必要不可欠であり、人間関係そのものが治療的意味を持っていることは、誰もが認めることです」（佐方, 1988a, p.56）。

【佐方の1988年の複数文献のうちの1988aのほうからの引用である。途中を執筆者の考えで省略したことがわかる。この例の場合は、「」で直接引用するよりも、執筆者の言葉で言い換えて「である」調にする、つまり間接引用するほうが望ましいであろう】

⑪ 自己愛について Freud,S.（1914）は次のように定義している。

ナルチシズム Narzißmus という術語は、臨床上の記述から由来したもので、一八九九年にP・ネッケ（P.Näcke）が、ある人間が自分の肉体を、あたかも異性の肉体であるかのように取り扱って、性的快感をとめないながらこれを眺め、さすり、愛撫して、ついには完全な満足状態に達するようになるような行為をいいあらわすために選んだものである。（懸田訳, 1969, p.183）

【ナルチシズム以下は Freud,S.の訳本の183ページに書かれている文章の引用である。先頭を1字落としている。原典は縦書きであるが、そのままの文章を横書きにした。洋数字や漢字混じりにしたほうが読みやすい部分もあるが、直接引用なので字句通りに書き出している】

- ⑫ ふつう精神病と呼ばれている病気の場合には、苦悩しないことが病気であるということは明らかです。… (省略) …精神が病気になることは絶対にありえないのです (傍点は筆者による)。… (省略) …こうした精神病の場合に、苦悩できないことがちょうど症状になることがあります。(Frankl, 1947 山田・松田訳, 1993, pp.63-64)

【Frankl の訳本から 2 ページにわたる文章 (複数ページは pp.と表記する) を、執筆者が賛同する部分について選択し、省略と強調を行いながら引用している。各行の先頭と末尾を 1 字ずつ落として書いている】

3. 間接引用の書式

間接引用とは、原著論文の要旨や内容をまとめたり、執筆者の文章に直して表現することである。参照した重要な関連研究を紹介する場合も含まれる。引用の多くはこの間接引用の形式になるが、間接引用の場合、正確かつ誠実に原著者の論点を伝えることが大切である。そのためには、

- 1) 要約だけでなく内容もきちんと読む。日本語論文を読み通さないのは以ての外であるが、外国語が苦手という理由で外国語論文のアブストラクトだけを読んで論旨を理解したつもりにならないようにすべきである。
- 2) 自分の都合のよい部分だけを選択して引用することは避ける。論旨に賛同するにせよ批判を加えるにせよ、原著論文を適切かつ正当に評価し参照しなければならない。そのためにも、原著論文を通読しないのは問題である。
- 3) 自分の意見と他者の意見とは明確に区別する。原著者の意見と同じということで無自覚的に同一化してしまい、その考えが自分のものなのか他者のものなのかを峻別せずに記述することは避けるべきである。

などに注意しなければならない。なお、出典を明記することを忘れてはならないが、間接引用の場合に引用ページは不要である。

例 ⑬ Kernberg (1977) は、慢性的な空虚さ、矛盾した自己知覚、情動的に意味あるものとして統合されていない行動、浅くて平板で貧弱な他者知覚、そして他者と共感的に相互交流できないことに、同一性拡散の証拠が示されるとしている。

【Kernberg の文献に書かれた内容を、執筆者が訳出してまとめ提示している】

- ⑭ 青年期の自己愛傾向に焦点づけた実証的研究において、これまでに自我同一性 (Cramer, 1995 ; 佐方, 1988b) をはじめ、友人関係 (長沼他, 2000 ; 小塩, 1998)、異性関係 (Campbell, 1999) などとの関連が検討されている。

【過去の研究を概観し、関連する研究論文について参照済みであることを示す。複数の文献を区切るときは、ふつう ; (セミコロン) を用いる。ただし、同一著者による複数の文献は、(カンマ) で区切る】

- ⑮ 1950 年頃に個人的なカタルシス体験をきっかけに Harvey Jackins が始めたコ・カウンセリングは、1970 年代にイギリスに導入され、革新的心理療法の一つとして発展することに

なった (Evison & Horobin, 1988)。

【Evison & Horobin の文章の要点に関する記載である】

- ⑩ 2001 年秋に行われた化粧品会社のアンケート調査では、OL の 3 人に 2 人が素顔に自信がないと答え、化粧をすると美人になれると思う人が 9 割近くもいた (長瀬産業株式会社ヘルスケア事業部, 2001)。

【長瀬産業が行った 2001 年のアンケート調査の結果を、執筆者が抜粋して紹介している】

4. 文献の孫引きについて

文献を参照する場合、原著論文にあたるのが原則であり、孫引き(引用の引用)は極力避けるべきである。現実には孫引きせざるをえないこともあるが、その場合は孫引きであることを本文中に明記しなければならない。

たとえば、「A (1972, X (2001) の引用による) の研究では…という結果が得られた」「B (1895) は…と述べている (Y (1994) の論文による、以下同じ)」「Z (1998) によれば、C (1930) は…と報告している」などと記述する。

そして、文献リストに載せるのは、実際に自分が参照した文献 (X、Y、Z) だけであり、読んでもいない文献 (A、B、C) を挙げるようなことはしてはならない。本文中に名前と年号が記載されていれば、上記のように孫引きであることを断っていない限り、すべてを文献リストに挙げるのがルールである。

原著論文またはそのコピーが入手できないとき、たとえば卒論や修論のように未公開であったり、すでに絶版になっていたりして、所蔵する図書館をいくら調べても見つけられなかった場合に限り、孫引きは認められる。ただし、卒論を書く際に、外国語が不得意なせいで外国語文献を直接理解するのが困難な学生の場合には、入手可能な外国語文献を孫引きしてもある程度仕方がないと筆者は思っている。しかし、決して日本語文献を孫引きすべきではないし、**大学院生が英語の文献を孫引きするのは、以ての外であろう。**

5. インターネット上の資料の扱い

最近インターネット上の資料を参考にすることも増えてきたが、怪しい内容も多いので引用・参照に当たっては十分注意しなければならない。ホームページ等に公開されている資料は、文責(ホームページの運営責任者や団体、資料の執筆者など)が不明な場合には基本的に参照しないほうがよい。また、出版物として入手可能な資料ならば、そちらを採用すべきである。インターネット上の資料は、更新される中で書き換えられたり、削除されたりするので、自分が参照した文章がそのままずっと存在するかどうかは保証できないのである。したがって、必ず URL (ホームページ・アドレス) とともに取得年月日を明記する必要がある。なお、年号は、文責者がとくに明示したり断っていない限り、その文書や資料がホームページ上に公表された年(基本的には、そのページがアップロードされた年)を採用すべきであるが、確認できないときは取得年に

しておくほうがよい。

先ほどの例⑩の長瀬産業(2001)の間接引用は、インターネットで得た資料である。資料として筆者がダウンロードしたのは翌年の2002年のことである。出所(文責)と公開日時がはっきりしているのので、例として挙げたけれども、本来ならば資料として公刊されているかどうかを確認する必要がある。そして、出版物として公表されていなければ、文献リストに挙げるときに取得年月日を明記して、この資料を採用すればよいであろう。

6. 文献リストの書式

文献リストの表記の仕方は、基本的に以下の通りである。□はスペースを表す。

- A 書籍(単行本) : 著者□年号□書籍名□出版社
- B 書籍(訳本) : 原著者□年号□書籍名□出版社□
 (原著者カナ表記□訳者【訳者名の後に(訳)と入れる】□訳出年号□訳書名□出版社)
- C 書籍の1章 : 著者□年号□題名□編著者【外国語文献の場合、編著者の前にInを入れ、著者は全員の名前をイニシャルを先に記して挙げ、編者は1人ならば(ed.)、複数なら(eds.)と表記する。なお、編者や監修者には(編)(監修)と付記する】□書籍名(掲載ページ【pp.が必要である】)□出版社□
- D 雑誌/抄録 : 著者□年号□題名□雑誌名/抄録名【正式名称を省略せずに記載する】、巻(号)【~~太字~~イタリック(斜字)にする。通巻ページ割付ならば号は必要ない】、掲載ページ【pp.やp.はいらない】【なお、雑誌名以降を、(カンマ)で区切る】

文献リストを作成する際、このような情報が常に要求されるので、文献・資料をコピーしたときには、忘れずにメモしておく必要がある。学会誌や紀要などの論文には、ヘッダー(紙面上部)に雑誌名や年・巻・号などの情報が印刷されていることが多いが、いつも確認する習慣つけておいたほうがよい。

書籍名や題名に副題がついているとき、原則として外国語文献の場合は:(コロン)で区切るが、日本語文献では副題の前後に-(ダッシュ)をつけて表記することになっている。

かつては年号に丸括弧()をつけたり、書籍名や論文名に鉤括弧「」『』あるいはクォーテーションマーク“”をつけたりしていたが、現在ではスペースで区切るだけの書式が一般的になってきている^{*1}。外国語文献の場合、題名や書籍名の中の各単語の1文字目に大文字を使うことがあるが、固有名詞やドイツ語の名詞のように大文字にするのが決まりの場合を除き、先頭の単語

^{*1} 2005年の改訂で、「心理学研究」の年号については()で表記することになった。

^{*2} 2015年の改訂で、英語表記の付加は不要となった。

以外は小文字にしたほうがよい。ただし、雑誌名は、1文字目を大文字にすることが多い。書籍名および雑誌名はイタリックで表記し、わかる範囲で出版社の所在地を出版社名の前に:(コロン)をつけて明記することになっている。~~また、現在『心理学研究』などでは、日本語論文にも可能な限りの英語表記を義務づけているが、卒論等では煩雑になるので省いてよいだろう。^{*2}~~

文献リストは著者の姓のアルファベット順に並べ、名前またはイニシャルを含む著者名すべてを正確に記載する。日本人の場合、姓または名前が一文字ならば姓と名前の間にスペースを入れるほうがよい^{*3}。同一著者の複数文献は年号順に、同一年ならば年号に a b …をつけて区別する。なお、心理学論文では、本文中に出てきた順番に文献をリストアップする方法は採らない。

研究論文の場合、引用していない単なる参考文献をリストアップすることはしない。文献リストに記載されていれば、必ず本文中にその著者名と年号が書かれているはずだし、前述したように、本文中に名前と年号があれば、孫引きであることを断っていない限り文献リストに挙げられているのがルールである。卒論等でどうしても参考文献を挙げたいときは、引用文献とは別に参考文献の項を新たに設けてリストアップすべきであろう。

以上、文献の参照・引用の書式について説明したが、基本的には、一貫して共通のルールに従って書くことと、論文中で紹介されたりリストアップされた文献や資料に、読者が確実にアクセスできるようにすることが重要である。ここでは一般化している共通ルールを記したが、学会誌等に投稿する際には、投稿規定を熟読してもらいたい。

説明のために例として取り上げた文献のリスト (例の番号と文献の種類を末尾に表示)

安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・島田 洋徳・宇津木 成介… 坂井 明子 (1999).
日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70,
384-392. →④ D

Campbell, W. K. (1999). Narcissism and romantic attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*,
77, 1254-1270. →⑭ D

Cramer, P. (1995). Identity, narcissism, and defence mechanism in late adolescence. *Journal of Research in
Personality*, 29, 341-361. →⑭ D

Evison, R. & Horobin, R. (1988). Co-counselling. In J. Rowan & W. Dryden (eds.) *Innovative therapy in
Britain*. (pp.85-109.) Milton Keynes: Open University Press. →⑮ C

Freud, A. (1936). *Das Ich und Abwehrmechanismen*. Internationaler Psychoanalytischer Verlag.
(フロイト, A. 外林 大作(訳) (1958). 自我と防衛 誠信書房) →⑤ B

Freud, S. (1914). Zur Einführung des Narzißmus. *Jahrbuch der Psychoanalyse*, 7.
(フロイト, S. 懸田 克躬(訳) (1969). ナルチズム入門 改訂版フロイド選集第5巻・性

^{*3} 「心理学研究」では、2009年80巻より、日本語表記氏名はすべて姓と名前の間に半角のスペースを入れるようになった。

欲論 日本教文社) →⑪ B

Frankl, V. E. (1947). *...Trotzdem Ja zum Leben sagen*. Wien: Franz Deuticke.

(フランクル, V. E. 山田 邦夫・松田 美佳 (訳) (1993). *それでも人生にイエスと言う* 春秋社) →⑮ B

河合 隼雄 (1992). *心理療法序説* 岩波書店 →⑨ A

河合 俊雄 (1991). *夢と五感 イマージョ*, 2, 210-215. →① D

Kernberg, O. F. (1977). The structural diagnosis of borderline personality organization. In P. Hartocollis (ed.) *Borderline personality disorders*. (pp.87-121.) NY: International Universities Press. →⑬ C

Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*. NY: Basic Books.

(マラー, M. S.・パイン, F.・バーグマン, A. 高橋 雅士・織田 正美・浜畑 紀 (訳) (1981). *乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化—* 黎明書房) →⑥ B

長沼 恭子・落合 幸子・落合 良行 (2000). 自己愛傾向からみた友人関係における“山アラシ・ジレンマ”への「心理的対処反応」の特徴 *筑波大学心理学研究*, 22, 183-190. →⑭ D

長瀬産業株式会社ヘルスケア事業部 (2001). <OLの化粧品に関する意識調査>結果報告 (2001.12.13.) <http://www.nagase.co.jp/whatsnew/20011213.pdf> (2002.1.10.取得) →⑯

中西 信男・佐方 哲彦 (2002). EPSI—エリクソン心理社会的段階目録検査— 上里 一郎 (監修) *心理アセスメントハンドブック第2版* (pp.365-376.) 西村書店 →② C

小塩 真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 *教育心理学研究*, 46, 280-290. →⑭ D

Rosenthal, D. A., Gurney, R. M., & Moore, S. M. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stage of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 525-537. →⑧ D

佐方 哲彦 (1988a). 子どもとよい関係をつくる 中西 信男・古市 裕一・佐方 哲彦・三川 俊樹 *子どものためのカウンセリング* (pp.55-79.) 有斐閣 →⑩ C

佐方 哲彦 (1988b). 同一性拡散の心理的特徴の側面—自己愛傾向および共感性との関連— *日本心理学会第52回大会発表論文集*, 108. →⑭ D

Shane, M. & Shane, E. (1980). Psychoanalytic developmental theory of the self: An integration. In A. Goldberg (ed.) *Advances in self psychology*. (pp.23-46.) NY: International Universities Press. →⑦ C

参考文献

Findlay, B. (1993). *How to write a psychology laboratory report*. Printice Hall of Austlaria Pty Ltd.

(フィンドレー, B. 細江 達郎・細越 久美子 (訳) (1996). *心理学：実験・研究レポートの書き方—学生のための初歩から卒論まで—* 北大路書房)

古郡 廷治 (1997). *論文・レポートのまとめ方* 筑摩書房

小笠原 喜康 (2002). 大学生のためのレポート・論文術 講談社

小笠原 喜康 (2003). インターネット完全活用編—大学生のためのレポート・論文術— 講談社
“執筆・投稿の手引き”改訂委員会 (編) (1991). 執筆・投稿の手引き 1991年版 日本心理学会

山内 志朗 (2001). ぎりぎり合格の論文マニュアル 平凡社

【註】 ホームページに公開するにあたって

- ・ヘッダーを新たに挿入した。
- ・編集ソフトやファイル変換の都合で、書式上、行の送りなどに出版物の原版とは異なる部分がある。
- ・以下の訂正を加えた。その後の変更で、行の情報を削除 (6/10/2016)。
 - 62 頁: 「つけないこともある」 → 「つけなくてもよい」 / 「必要である」 → 「入れたが、年号で文献を区別できるので必須ではない」
 - 65 頁: 翻訳されて公刊済みの文献から引用するのは孫引きではないことを言いたくて、「英語の文献 (翻訳されたものを除く) を」と書いたが、誤解を招く表現なので括弧書きを削除した。
 - 66 頁: 外国語文献で 1 章を引用する場合に In の後に挙げる著者は、イニシャルを先にすべきなので、「イニシャルを先に記して」を入れた。
 - 68 頁: ② B → ② C

【補遺】 手引きの変更について 13/7/2005 ~ 25/1/2014

2005 年春、日本心理学会の機関誌等編集委員会は、新しい『執筆・投稿の手引き 2005 年版』を作成し、従来の文献のリストアップの書式に変更を加えている。新しい手引きでは、著者と年号の書き方を APA (アメリカ心理学会) にならい、年号に丸括弧をつけて、その後にピリオドを打ち、「著者名 (年号).」と書くように指示している。また、翻訳書については、原著を原語で表記した後、丸括弧の中に日本語で翻訳書に関する情報を表記する方法に変更されている。その際、日本語で原著者名をイニシャルつきで先頭に書き入れることになった。そして、複数ページを表す場合、これまで Pp.と書いていたが、pp.に変更された。

また、2009 年 80 巻より、日本語氏名を表記するとき、すべての姓と名前間に半角スペースを入れる書式に変更されている。

機関誌等編集委員会 (編) (2005). 執筆・投稿の手引き 2005 年版 日本心理学会

【注意事項の追加】 27/2/2012

最近、大学の紀要等からの引用であるにもかかわらず、大学名の記されていない表記が目立つ。CiNii などから取得した文献に多いが、複数の大学で同一名称の雑誌を発刊していることもあるし、また紀要等に収録される論文は玉石混淆なので、学会誌ではないことを明示するためにも大学名を書き加えるようにすべきだと思われる（あくまでも私見である）。

【2015年度版での変更】 14/1/2016～20/1/2017（最終修正日）

日本心理学会の機関誌等編集委員会は手引きを2015年版に改訂した。主たる変更点は、日本語文献において英語表記の付加が不要になったこと、学術雑誌の巻号がボールド（太字）からイタリック（斜字）に変更されたこと、そして複数著者の文献引用の表記が変更されたことである。つまり、本文への引用で著者が6人以上の場合は、初出から第1著者名以外を表記せず「他」「et al.」とし、引用文献には7人までは全員の名前を表記するが、8人以上は第1から第6著者までの名前を書いて「…」でつなぎ最終著者名を表記するようになった。

また、書籍の1章を引用するときに、これまで末尾に載せていた掲載ページの pp.xx-xx. を、書籍名の後に丸括弧で表記する (pp.xx-xx.) という変更もあった。

手引きの改訂ごとに、このマニュアルにも変更を加えてきたが、今回をもって最後の更新とする。今後は、各自で日本心理学会の下記ホームページにアップロードされている「執筆・投稿の手びき」(<http://www.psych.or.jp/publication/inst.html#inst01>) で確認してもらいたい。

機関誌等編集委員会（編）(2015). 執筆・投稿の手引き 2015年改訂版 日本心理学会